

5月5日「復活と焼き魚」 I コリント 15：50～58、ルカ 24：36～43

イースターの日の夕方のことです。この日は朝から、大騒ぎでした。マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、数人の女性達がお墓から帰って「お墓が空っぽだった。天使と出会った」と大騒ぎを始めたのです！ペトロが確認しに行くとしたしかにお墓は空っぽでした。すると、次から次へと、イエス様に出会ったという目撃証言が届きます。いったい何が起きているのか、弟子達は大混乱していました。そこにまた新しい証言がもたらされました。諦めてエマオへと帰っていったクレオパともう一人の弟子が走って帰ってきて言ったのです。「私たちはイエス様に会いました！エマオへの道を一緒に歩いて下さったのです！」そんなことを話していると突然、聴きなれた優しい声が聞こえてきました。「あなたがたに平和があるように！」皆が顔を上げると、そこにはあのイエス様が立っていたのです・・・

その場に居た全員が凍りつきました。恐れてうろたえました。それもそのはず。だって弟子達はイエス様が十字架につけられるとき、誰一人助けようとしなかったのです。自分も捕らえられるかもしれない、怖くなって逃げ出したのです。「たとえ死ぬことになってもあなたに従います！」そういったペトロなど、3度も「あんな男のことは知らない」と言ったのです。弟子達はイエス様が自分たちのことを恨んでいる。呪おうとしている。裁くために化けて出たのだと怯えたのです。ところがどうやらイエス様の様子はお化けっぽくなさそうです。弟子達にやさしく語りかけます。「なぜうろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。わたしの手や足をみなさい。まさしくわたしだ。」

イエス様が怯える弟子たちに言われたことは「手や足を見なさい」でした。そこには何があったのでしょうか。もちろん十字架につけられた釘のあとです。ヨハネ福音書には兵士に槍で突かれたわき腹も見せたとかかれています。キリストはご自身の傷を示されます。普通、私たちは自分の傷を人に見せたくありません。恥ずかしいからです。それは弱さの証だからです。けれどもキリストは自ら弱さを私たちに打ち明けられたのです。

イースター礼拝の日に、皆さんには私と妻が大変お世話になった榎本てる子先生の話をしました。55歳の若さで天に召された先生です。てる子先生はとてもパワフルな方だったのですが、私たちが在学中から徐々に病気によって体調が悪くなっておられました。ある時、長期間、休講が続いたことがあって、復帰された先生と出会ってびっくりしました。介護用の車に乗り、呼吸器をつけているのです。「あのてる子先生が！？」元気な時の姿からは到底予想できないものでした。「どう接すれば良いのだろう」私が戸惑っていると、先生はこちらに来て言いました。「この車カッコええやろ。あんたは

乗せたらへんで」ニヤツとして去っていかれました。たぶん「気遣い無用だ」と伝えたかったのでしょう。わたしは戸惑いを感じた自分のことを先生が受け入れてくれたのだと感じたのです。

私はこの部分、イエス様は冗談っぽく言われたのではないかと思っています。「ほら、釘の跡あるやろ？手を入れてみるか？」それは私たちを心から受け入れ、赦して下さっている証です。この言葉で弟子たちの心から恐れやおびえが消えていきます。そして喜びへと変わっていきました。そんな弟子達の様子を見て、イエス様は更に言われました。「ここに何か食べ物があるか？」イエス様も弟子達も一緒に魚を分け合いました。それはあの時と一緒にでした。そうです、ガリラヤ湖のほとりで5000人もの人達と一緒にパンと魚を分け合ったとき。弟子達の心には本当に喜びが満ちあふれました。

私が今日の物語でとつても気にかかった言葉があります。「あなたがたに平和があるように」イエス様はそう言って弟子たちと再会されるのです。こんな劇的な場面での挨拶としてはなんだか不自然な感じもします。ところで、日本ではお化けはなんと言って登場するのでしょうか。「うらめしや〜」でしょうか？平将門の首塚とか、菅原道真のための天満宮とか、祟りや怨霊を恐れて建てられた神社やお寺がたくさんあります。弟子達も最初は勘違いしました。「**27節 彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った**」と書いてあります、つまりイエス様が自分を十字架につけた者を呪い、恨みを果たすために復活されたと思ったのです。私たちはやっぱりそう考えます。死よりも強い思いは「呪い」だと。死を乗り越えるものは「復讐心」だと。けれども、イエス様の復活はそのような私たち人間の根源にあるそんな恐怖を打ち消されます。イエス様は敵を呪い、復讐するために復活されたのではなかったのです。私たちに平和をもたらし、祝福するために復活されたのです。イエス様が示されたのは復讐心よりも強い力、愛の力でした。「あなたがたに平和があるように！」そう言って復活されたのです。

4月21日イースターの日の夕方、私はイースター礼拝と入院されている方々への訪問を終えて、家へとたどり着きました。礼拝は大勢の方と守ることが出来ました、訪問聖餐は喜んでいただけました。働きへの満足感と心地よい疲労感に浸って、ふと、スマートフォンを開くとすべてが吹き飛ばされたのです。皆さんもご存知の通り、21日、スリランカ東部のバティカロアという町でイスラム過激派によって複数の教会が爆破され、300人を超える方々の命が奪われたのです。すぐに復活祭が狙われたとピンと来ました。復活と喜びの日が死と絶望の日へと変えられたことに、激しい憤りを覚えました。また、このことを通じて、宗教的対立、民族間の対立が激化するのではないかと

不安を覚えました。ところが、数日前に、クリスチャン新聞に爆破された教会の一つである、福音派シオン教会の主任ロシャン牧師の声明が掲載されました。紹介します。

「私たちは傷つき怒っている。だがそれでも、シオン教会の主任牧師として全会衆とともに自爆テロ犯に言う。あなたが私たちにしたことが何であれ、私たちはあなたを愛しています。そして赦します。主イエス・キリストを信じるゆえに」「イエス・キリストは十字架の上で『父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかわからないのです』と言われた。私たちもイエス・キリストの御足の後に従い、主に言います。この人たちを赦しますと」

皆さんはどう思われるでしょうか。私はとても勇気ある言葉だと思います。私たちは愛する人が傷つけられれば怒ります。憎みます。もしかしたら、シオン教会の中には怒りに任せて復讐を考えている人達もいたかもしれません。実際、今回のテロもニュージーランドのモスクで起こった銃乱射事件への報復として行われたとも言われているのです。そんな人達に向けて、それでも赦しましょう。敵を愛しましょうと呼びかけます。キリストに倣うことを呼びかけます。

私はこれまで、弟子達は怖くなって、引きこもっていたとばかり考えていました。けれども、もしかしたらそれだけではなかったかもしれません。12弟子の中には「熱心党」のシモンもいました。熱心党とはローマの支配に対抗するユダヤ教の過激派です。要はテロリストです。イエス様の弟子にはそのような人達もいたのです。もしかしたら、弟子たちの中にはイエス様を殺された仕返しに、ユダヤの議会に、ローマ帝国に復讐を計画している者もいたかもしれません。それこそ自爆テロでもって復讐を果たそうとしていたかもしれません。イエス様はそんな人達のところにもきっと現れたはずですよ。同じように「あなたがたに平和があるように！」と。復讐するのではない、赦しなさいと復活をもって示すためにです。

私たちもこのキリストに倣うことを真剣に考えなければなりません。ルカ福音書の10章にはイエス様が72人の弟子たちを御自分が行くつもりだったすべての町や村に派遣される物語が描かれています。「行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。どこかの家に入ったら、まず『この家に平和があるように』と言いなさい。その家に泊まって、そこで出されるものを食べ、また飲みなさい」また、『神の国はあなたがたに近づいた』と言いなさい」(ルカ10:1~9)

イエス様はこの教えどおりに弟子達に接せられたのです。平和があるように。弟子達

のために平和を祈ります。魚と一緒に食べ、そして神の国について改めて教えられます。そして私たちにも同じようにすることを望まれます。私たちも人々に平和を告げ、神の国を伝えるために遣わされているのです。

今日、私たちはもう一箇所、コリント書に書かれたパウロが復活について語る言葉を聞きました。パウロによれば私たちはキリストの復活によって朽ちるものから朽ちないものへと変えられました。罪が赦され、永遠の命を与えられたのです。復活の神秘です。最後にパウロはこう言って私たちを励ましてくれます。「主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです。」そうなんです。イエス様が惜しみなくその傷をさらし、私たちを赦してくださいます。復活の力で私たちを平和の道へと押し出されます。そして私たちの苦勞は決して無駄にはなりません。私たちがキリストに従うために受けた傷も、苦難も誰かを癒す祝福の源になりうるのです。

先ほどの、シオン教会のロシャン牧師の声明を受けて、スリランカの教会指導者であるクリシャンティ牧師はこう語ったそうです。「憎しみの代わりに赦しをとというロシャン牧師の言葉に、私たちはただ耳を傾けるほかない。イエス・キリストは私たちを、迫害する者さえ愛するよう招いておられる。それはこのような状況の中で愛を選ぶことにまさって力あることだ。赦しましょう。ともに神の国を立て上げましょう。諦めてはいけません。」

イースターの日に苦難を受け、なおもキリストへの望みを固くしておられる教会の歩みを私たちは覚えたいと思います。天に召された方に平安を、傷付いたスリランカの教会の方々に癒しを祈りましょう。そして世界の今なお失望、悲しみ、痛み、のある方々のために平和を祈りたいと思います。そのような中にあってもなおキリストの復活の力が及ぶことを改めて信じたいと思います。復活とは神秘的な力です。私たちの傷や苦難もイエス様は無駄になさいません。誰かを生かす力へと変えてくださるのです。